

明治の妙高登山

中川 三男 (中50回)



明治13年6月4日、英国公使館二等書記官兼日本語書記官アーネスト・サトウが、残雪深い妙高山に登った。

5時半に赤倉を出発したサトウを、案内人は前山の腹を巻いて、南地獄谷の2つの温泉へと案内した。ここから雪の斜面を40分ほど登り、北地獄谷から来る山道に出たが、その後案内人が道に迷い、深い笹林をかき分けて進まねばならなかった。疲労が大きく、辛うじて2インチほどある岩棚に3本の鎖のついた箇所(笈摺?)で足を休めた。

雪田と岩屑の急斜面を越して、10時10分前に頂上に着いたが、くたくたに疲れたと日記に書いている。山頂には阿弥陀堂があった。

11時10分頂上を後にし、シラネアオイやサンカヨウの素晴らしい標本を採取しながら、3時丁度に宿に戻った。食事をした後、4時少し過ぎに出発し、関山まで歩き、それから車(人力車)で新井に行き、奈良屋に泊まった。翌日は、新潟まで車を雇って6時15分前に出発した。今町(直江津)まで妙高山脈の美しい風景が見え隠れし、サトウの心を慰めた。

明治10年2月、2回目の賜暇から戻ったサトウは、上司パークスの訓令で、長崎からそのまま鹿児島に向かい、決起直前の旧

知の西郷隆盛に面会した。サトウは、西郷が生前会った最後の中央人であったろう。

東京に戻ったサトウは、外交官としての職務の傍ら、精力的に各地に旅行と登山を続けた。明治10年には大菩薩峠を越して甲州路を歩き、明治11年には針ノ木峠を越して立山に登り、御岳山を回って帰京した。明治13年には秩父から清里高原に入り、ハヶ岳に登った後、善光寺から飯縄山に登り、田口から赤倉に行き、上記の妙高登山を行ったのである。

サトウがこのような熱心に旅行を行った理由の一つは、翌明治14年に出版される「日本旅行案内」(英文)の編著者の一人として、これに資料を提供するためであった。

妙高山に初めて登った外人はアーネスト・サトウであると思われそうだが、実は、「日本アルプス」の命名者ウィリアム・ガウランドである。明治13年、地震学者ジョン・ミルンが「日本アジア協会」で行った講演の中で、ガウランドの登った山々を挙げているが、その中に妙高山が入っている。

信越線が直江津まで開通するのが明治26年である。このころから、中央人士の妙高登山が増えてくるが、最初は、地質や植物などの研究者が多かった。後年氷河論争で有名になる山崎直方ナオマサは、明治26年妙高・火打・焼山一帯の詳細な調査を行った。このとき山崎は東大地質学科の学生であった。

翌年には、東大植物学教室の松田定久が植物採集のため赤倉から登り、山中の小屋に一泊して登頂後、燕温泉を回って赤倉に戻った。

明治30年代後半になると、日本においても登山のため登山—アルピニズムが興ってきた。中越在住の^{オオダイラフキヲ}大平晟の明治36年の妙高紀行は、明治38年に設立された日本山岳会の機関誌「山岳」の第1年第1号を飾った。

明治37年には、日本アルプスの父ウォルター・ウェストンが夫妻で登頂したことは確かであるが、詳細は不明である。

同年7月22日、21歳の青年^{ヒサヨシ}武田久吉が、植物調査の目的で、赤倉から登山した。父アーネスト・サトウの登山から24年後であった。

香嶽楼に一泊した武田らは、一人の案内者を連れて、6時に出発。急な草原と樹林帯を登った後、前山の腰について回り、南地獄谷の温泉に達する。ここから、ネマガリダケの密生した急斜面を登りきって、天狗平に着いた。さらに、笈摺りの難所や「磊々たる鎔岩」地帯を越えて、11時半ころ頂上に着いた。広い山頂を歩き回って植物採集を続け、2時半ころ帰路についた。

山と植物を愛好する気質と健脚は、まさに父譲りのものであった。

このころから、武田久吉を含め、後年山岳界の有名人になる多くの人々の妙高登山が始まる。志村烏嶺、田部重治、冠松次郎などである。

明治41年、妙高登山史上異色な出来事があった。高田高等女学校生徒70名が登頂したのである。妙高山の女人禁制は明治2年に解けていたが、女学生の集団登山は、当時としては珍しかった。発案者の山中^{セイタ}鉦太郎校長は、登山口の選定から服装、備品、校医の付添いに至るまで、入念な準備を講

じた。2回の体格検査に合格した隊員には「麦藁帽子を被わり、猿股及び膝に達せる短袴を穿ち、脚絆甲掛草鞋をつけ」させた。

8月1日、^{ヒサヨシ}武田久吉らと、燕温泉を午前4時出発、途中3名ばかり鼻血を出して卒倒するということがあったが、頑張り通して、11時に全員登頂。校長の発声で両陛下の万歳を三唱し、赤倉に下山した。

明治最後の年44年の5月には、レルヒ少佐の一行が燕温泉からのスキー登山に成功した。

こうして大正に入るのだが、高田高女の快挙に、好敵手？高田中学も黙っているわけではない。大正6年、スポーツ教育に熱心な鈴木卓苗校長自らが先頭に立って、全校生の妙高登山が行われた。このころから高田中学の全校登山は年中行事になっていった。昭和に入ると、妙高山組と同時に、南・北アルプス、八ヶ岳、浅間山などへ登る組が出発している。

全校登山は、多少の断続はあったが、戦時下の昭和13年と昭和16年まで続けられた。ちなみに、筆者はこの2回の登山に参加し



絶頂近きにあり（某教諭戯画）
（参考文献6より）

ている。戦後の高田高校の全校登山は、高田中学からの伝統を継ぐものであろう。

(後記)

本稿は、故蟹江健一氏（高6回）の頸城山地の登山史に関する詳細な研究によるところが大きい。しかし、氏の遺稿には、当時関係資料が公刊されていなかったため、ガウランド、サトウ、ウェストンについては全く触れられていない。あえて筆を執らせて頂いた理由である。

主要参考文献

1. 蟹江健一：頸城山地の登山小史と展望、「妙高」No.4, 1972.
2. 蟹江健一：頸城山地に関する文献、「雪稜」5号、1973.
3. アーネスト・サトウ（庄田元男訳）：日本旅行日記1、1992.
4. アーネスト・サトウ編著（庄田元男訳）：明治日本旅行案内 下、1996.
5. 武田久吉：原色日本高山植物図鑑(正)、増補改訂版、1982.
6. 山中鉦太郎：妙高登山の記、「山岳」第4年第3号、1909.
7. 高田高等学校百年史刊行委員会編：高田高等学校百年史、1973.

